
~ IS ~ 雨弓と雷光

カトウハジメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～IS～雨弓と雷光

【Nコード】

N0546BA

【作者名】

カトウハジメ

【あらすじ】

女しか使えないはずのISを使える主人公（男の娘）は、親を殺したIS委員会に復讐するためにIS学園に潜入する。その筈が主人公（唐変木）はハーレムをつくってしまう。

注 作者の処女作ですので何か不満があったら教えて下さると嬉しいです。

ハジマリ

僕が家に帰ると、家の中に数人の見慣れない男がいた。何か両親ともめていたが、どうせいつものやつだろう。僕の親はISの開発をしている。しかし国の研究所に勤めているわけではなく、技術を売っている。今はドイツのIS開発をしている。四年前まではフランスにいた。

「コアの解析が出来たならこつちによこせ！」

「そんな噂、本当な訳が無いじゃないか！」

「お前らが渡さないなら力づくでも渡してもらおうぞ！」

早く行かなきゃ！父さんと母さんが危ない！

パンパンッ

僕が家に入ったときにはもう遅かった。

父さんと母さんは頭から血を流していた……

「う、うわあああああああああああああ」

父さんと母さんが……

次の瞬間、僕はISを纏っていた。二機のISを……

気づかないうちに僕は全身の刃を奴らに向かって飛ばしていた。奴

らの半分ぐらいは倒しただろうか。次に僕は全身の銃を奴らに対して放っていた。威力が強すぎたのか家ごと吹きとんだ。

僕は気が付いたらISを解除していた。この後直ぐに警察が駆けつけた。僕の両親と奴らは全員死んでいた。僕は警察の人に、家が崩れているのを見て固まってしまったのだろうと言われた。奴らはIS委員会の人らしい。僕は両親の友達のIS開発の人に預けられる事になった。

各種設定

主人公

小鳥遊たかなし空そら

一人称 僕 髪は黒で肩にとどくかとかないかギリギリくらい
男の娘、親の仕事がIS開発の関係でヨーロッパにいる事が多いの
でかなりの数の言語が話せる。唐変木。6歳までは日本、10歳ま
でフランス、14歳までをドイツですごす。フランスでは家が近く、
学校が一緒だったからシャルと幼馴染。ドイツでは両親の仕事の関
係で軍に行く事が多く、ラウラと友達。専用機はあまゆみ雨弓とらいこう雷光

雨弓

機体カラー 虹 第三世代

完全にV字まで開く銃を全身に47個装備したIS。銃のVの間か
ら虹色の粒子でできた菱形の板のような物がでている。その粒子で
完全なステルスを実現した。このステルスが第三世代兵器。この銃
以外武装も装甲も何もついていない不良品。しかし、銃の間から出
す板を刃として扱う事ができるし、その板を装甲として扱う事がで
きるためいらぬ。銃をビットとして扱う事ができる。

雷光

機体カラー 銀 第三世代

真ん中で縦に半分に分かれ、銃口が出てくる剣を全身に47個装備
した機体。此方は薄いエネルギーシールドのようなものでコーティ

ングした剣により、相手の攻撃を完全に受け止める事ができる。この剣が第三世代兵器。この剣以外は何も装備していない。この剣はビットとして扱う事ができる。

美香と美希

「次の駅で乗り換えか」

僕は両親の友達の子供のIS研究者のところに向かっている。その友達は海辺の田舎町に住んでいるらしく、電車で一時間半、バスで三十分乗り継いだ所にある。

数十分後

「ここか」

ピンポーン

僕はチャイムを鳴らした。

「はい」

中から若いお姉さんがでてきた。

「今日からお世話になる小鳥遊 空です」

「ああ、君が空くんか、本当に君男なの？」

「何言ってるんですか。男に決まってるじゃあないですか」

「まあ、話はリビングですとして、さあ上がって」

「お邪魔します」

「お邪魔しますじゃあないよ、ただいまだよ」

「ただいま」

リビングにて……

リビングには二人の女の子がいた。片方は背が高く、いかにもお姉さんって感じの子で、もう片方は背が低く、お姉さんみたいな女の子の後ろに隠れているいかにも小動物みたいな少女だ。

「うう、お姉ちゃん。やっぱり無理だよ」

「ほら美希、困ってるじゃない」

あ、小動物みたいな方が逃げた。すぐに捕まった。捕まるの早いな。

「うう」

妹が涙目になってる。可愛いな。そんな事をしていると、若いお姉さんがお茶を持って戻ってきた。

「自己紹介してなかったわね。私は神崎美緒。ISをつくってるよ」

さっきの若いお姉さんだ。

「私は美香よ。」

いかにもお姉さんみたいな方だ。

「うう、わ、私はみ、美希です。」

小動物みたいな子。

「僕は小鳥遊 空です。今日からお願いします。」

「か」

「か？」

「可愛いいいい」

え？ちよつあつ駄目そこはあつああ

美香さんが僕に抱きついてきた。

「美香さんやめて下さい」

「ああ、美香さんっていうのやめてくれない？呼ぶならお姉ちゃん
って呼んで」

「お姉ちゃん」

「やっぱり可愛いわ」

「同年なんだけどね……」

「え？同年なんですか？」

「そうだよ、美香ちゃんも空くんも、あそこにいる美希ちゃんも同
い年だよ」

「え？何で同年なんですか？」

「そんな事は神様に聞いてよ。」

「あの、お姉ちゃんと美希ちゃんは何で同年なんですか？」

「ああ、それ？それはあの二人は拾ってきた子なんだよ」

「あとは何で同年なのに僕と美希ちゃんはお姉ちゃんの事をお姉
ちゃんって呼ぶんですか？」

「ああそれは多分誕生日が美香ちゃんの方が先だからじゃない？」

「私の誕生日四月二日なのよ」

ああそういう事か

「ん？何これ？」

美緒さんが僕のケータイに着いたお守りを……

「両親が生きているときに僕に僕に渡したお守りです」
「へえ、ちよっと見してね」

そう言っつて美緒さんは僕のお守りを取っつてお守りの口を……

「っつて何やっつてるんですか!」

「お守りの口を開けてるんだよ」

「やめて下さい!」

「この中からISSの匂いがしたんだよ」

「ISS?」

「もしかして君の両親は自分達が死んでしまう事をあらかじめわかっつていたんじゃないかな?」

え?僕の両親はあらかじめわかっつていた?自分達が死ぬ事を?そうかもしれない。お守りの中にISSが入っつていたのも自分が死んだときに美緒さんにISSが渡るようにしたのかもしれない。

「あれ?このISS一回起動させられたみたい」

「え?それっつてどういっつ……」

「いや、このISS、使いやすいうように一回起動するとお札の中に入っつていたのが、待機形態になるように出来る」

「それが待機形態になっつてるっつて事ですか」

指輪が出てきた。

「これ、二機のISSだよ!」

え?確かに二重になっつてる。

「後で検査してもいい？」
「両親が美緒さんに渡したかったんだからいいですよ」
「いや、ISじゃあなくて君を」
「え？まあいいですけど」

次の日

「検査の結果が出たよ。IS適性はAだったよ」
「何で僕男なのにIS適性があるんですか？」
「わからないよ、これからどうする？こんな事誰かにばれたら即実験動物だよ？」
「それは嫌です」
「そういえば両親を殺したIS委員会の奴ら憎くないの？」
「正直、憎いです」
「じゃあIS学園に入ったら？IS委員会に近づくとよ」

そうだ、僕は今中学三年生、来年は高校だ。

「って入る時点で僕、実験動物じゃあないですか！」
「そこはほら、女装するとかしてさあ」

こうして僕はIS学園に入学する事になった。

IS学園（前書き）

IS学園に入学です！

IS学園

僕は今IS学園にいる。女装して入学するのはかなりスムーズに進んだ。雨弓のステルスは粒子で周りの風景に溶け込むのだが、それを応用して、体つきを女の子っぽくしたのだ。僕の身体が女の子っぽいからできるんだって美緒さんは言っていた。それはあまり嬉しくなかった。ちなみに僕は雨弓しか持っていない。雨弓の調整をしていたら時間が足りなかったらしい。

「小鳥遊 空です。よろしく願いします」

「可愛いいい」

「ぎゅ〜ってしたい!」

「やっぱり可愛いなあ、空は」

最後のお姉ちゃんだよねえ？

織斑くんはかなり引いています。ちなみに神崎姉妹は二人とも一組だ。そこらへんは美緒さんが織斑先生に頼んだらしい。美緒さんは織斑先生と友達だったらしい。

三時間目の前の休み時間

織斑くんがセシリアさんに絡まれてる。

「極東の島国というのは、こんなにも未開の地なんですか?」

ピキッ

何かがきれる音が聞こえた。

「イギリスだってたいし」「あれ？世界一料理がマズイ国って何処でしたっけ？」

「うう」

つい言ってしまった。

キーンコーンカーンコーン

三時間目

「よし、来月のクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。立候補、推薦、何でも構わん！誰かいるか？」

「私は織斑くんを推薦します！」

「私は小鳥遊さんがいいと思います！」

僕を推薦したのは絶対にお姉ちゃんだよね？織斑くんは面倒臭そうな顔をしているし。

「他にはいないか？いないならこの二人の中から決める」

「ちょっと待って下さい！納得がいきませんわ！大体実力で言えばわたくしなのに、それを珍しいからという理由で未開地の猿などにやらせないで下さい！」

「いい加減にしようよ、その日本を馬鹿にするの」

またやってしまった。

「だったら分かりやすくISで勝負しようよ」

うん、これならいいね！

「俺はどれくらいハンデをつければいいんだ？」

ドンツ

誰かが机を叩き、立ち上がったみたいだ。

「たかがISを使えるだけで調子に乗らないで下さい！だから男は嫌いなんです！私も立候補します！」

「とりあえず座れ、グアリーノ」

あれはイタリアの代表候補生のアレツシア・グアリーノさんだな。

「じゃあハンデはいい」

織斑くん、それが普通だよ？

「じゃあ一週間後に織斑と小鳥遊、オルコットにグアリーノは第三アリーナでISでクラス代表を決める」

どうしようかなあ、オルコットさんのティーズ型も、グアリーノさんのテンペスタII型も射撃型だったから対策考えておかないと。

放課後

「私たちとは部屋別になっちゃったね、空お姉ちゃん」

「そうなの？」

「私とお姉ちゃんは一緒の部屋だよ」

「へえ」

「じゃあまたね」

最初は僕に怯えてたけど今はかなり美希ちゃんに心を開いてくれている。それは何だか嬉しいなって。某魔法少女アニメのセリフを思い出してしまった。

そう言えば僕の部屋はどうなんだろう。女装してるから女の子と同室なのかな？

自室前

「ここが僕の部屋か」

鍵を使って中に入る、本当はもう少し前から寮に荷物を持ってくるらしいんだけど、僕は雨弓の調整がギリギリまでであったから時間がかかってしまった。荷物はステルスで見えなくしてあまり迷惑にならないようなところに置いてある

「誰かいますか？」

返事が無い、誰もいないようだ。入ったら荷物が置いてあった。やっぱり女の子と一緒に部屋みたいだ。聞く所によると、隣は織斑くんの部屋らしい、彼には正体を教えようと思っているので言ってみよう。

「誰かいますか？」

「はい」

「ああ織斑くん、話があるので上がってもいい？」

「いいぜ、篠ノ之さん、小鳥遊さんを上がらせてもいいか？」

「勝手にしろ！」

以外と簡単に上がった。

「で、話って何だ？」
「ちよっと待ってね」

そう言っつて僕は雨弓の粒子をとく。
胸が徐々に無くなり、体つきも徐々に男らしく……はあまり変わらなかつたが喉仏がでてきた。髪も背中の中あたりまであつたのが肩まであるかないかまで短くなった。

「まさかお前男なのか？」

「うん、まあ男どうし仲良くしようね」

「でも、あまり変わらないな」

ピキッ

「織斑くん、何が変わらないって？」

「あの、その、ほら雰囲気とか！」

「そこに座りなさい！」

それから僕は織斑くんに説教を三十分ぐらいして、僕の事を空って呼ぶことと、僕は織斑くんのことを一夏って呼ぶことを伝え、部屋を後にした。

部屋に戻るとそこにいたのは、

男嫌いのアレツシア・グアリーノさんだつた。

アレッシア・グアリーノ

僕が一夏の部屋から帰ると、アレッシア・グアリーノさんがいた。

「えっと、グアリーノさんだよ。よろしく」

「よろしくね！小鳥遊さん！」

「ベッドどっち使う？」

「私はどっちでもいいよ」

「じゃあ僕は奥のベッド使うね。シャワーとかどつする？」

「私が先でもいい？」

「いいよ」

ぐっぐっ

僕のお腹鳴っちゃったよ……聞かれて無いといいな……まあこんな部屋に二人だけだし聞かれてるよね……

「くすっ、じゃあご飯食べに行こうか」

笑われちゃったよorz

「美味しいね ここの料理、グアリーノさん」

「そうだね、そんなに食べるの？」

「いや〜いっぱい食べないとどんどん痩せてっちゃうから」

「何その羨ましい体質」

それにしてもここの料理すごく美味しいです。こんなにいっぱい食べないよね、女の子は、直ぐにばねちゃうなこれは。でもグアリーノ

ノさんは男嫌いだからばれたらどうしよう。弱みでも握ればいいのかな？

「どうしたの？小鳥遊さん？急に黙り込んでしまった」

「別に何でもないよ！うん、何でもない」

「変なの」

そのまま僕は何も喋らなかつた。

自室にて

「シャワー空いたよ」

「うん、今入るよ」

この時間は嬉しい、女装しなくていいし。

僕が出ると、グリーンノさんは電話をしていた。弱みを握れそうだったから脱衣所に隠れてしまった。イタリア語で何言ってるのかわからない。ケータイで録音して美緒さんに送ろう。

僕は録音が終わって少ししてから脱衣所を出た。

「小鳥遊さん、長かったね」

「いや、電話してみたんだから悪いかなって思ってた」

「ごめんね気使わしちゃって、出てきても良かったのに」

「じゃあ今度からはそうさせてもらおうね」

「うん、よろしく」

あはは、騙しちゃったよ……

「そういえば小鳥遊さんって専用機持ってるの？」

「うん、持ってるよ。これ、雨弓っていうんだ」

そう言つて雨弓の待機形態の指輪を見せた。普段からISを使つて
いる僕は待機形態の指輪のままステルスを使うことができる。今は
雨弓しか持つていないので半円型の石がついた白銀の指輪である。

「変な形だね。見せてくれてありがとう。寝よっか」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

翌日の放課後

「空くん、昨日の電話、翻訳できたよ」

「ありがとうございます」

内容はこんな感じだった。

「それで、結婚の件は」

「お前がIS学園を出たらな」

「もう少したってからでは駄目ですか？」

「駄目だ。お前、誰のおかげでお前らの家族が裕福に暮らせている
と思つてるんだ？俺のおかげだろ？」

「……はい」

「今度の長期休暇のときはイタリアに来いよ？たっぷり可愛がつて
やるよ。今度こそはやるうな？」

「……はい」

「という事で、IS学園を出たら即結婚な。これでお前もマフィア
の世界へ足を踏み入れることになるぜ」

「では切ります」

ここで電話は終わっている。状況を整理すると、グリーンノさんは
IS学園を出たらマフィアの人と結婚するらしい。グリーンノさん

はそれをあまり良く思っていないらしい。

これは弱みを握ったのかな？うん。グアリーノさんには男ってばらしても大丈夫そうだ。

そんな事を考えていると、グアリーノさんが帰ってきた。

「グアリーノさん、これ」

そう言っつて僕はそれを再生した。

「こんな物を私に聞かせてどういうつもり？」

「交換条件。グアリーノさんのことを言いふらさないかわりに僕の秘密を知っても黙っていてほしい」

「わかった。先に私のこと詳しく話すね」

「私は最初普通の家に生まれた。十二歳までは普通に育った」

そう、十二歳までは……

アレツシアとレイ・テンペスタII

私はお母さんに連れられて私はいつにあつた。なんでもお母さんが最近知り合つたらしく、私は何故かあいつの所に連れてこられた。あいつは私の顔を見るなり、ニコニコし始めた。あいつはお母さんに「娘さん可愛いですね。結婚したいぐらいです。」と言つた。お母さんはマフィアとかが好きで、多分そのせいであいつに酔っていたんだと思う。お母さんは「こんな娘で良かったら」と言つた。私は正直嫌だつたけど叱られるのが怖かつたから言えなかつた。あいつは「じゃあ婚約しましょう」とか言い始めた。結局婚約してしまつた。次の月から毎月私の家にはお金が送られてきた。私は色々考え、ISの代表候補生になつてしまえばあいつから逃げられると思ひ、ISの適性をはかつてもらつた。結果はAだつた。こんなに上手くいくと思つていなかった私は、現在のIS学園卒業まで結婚を伸ばしてもらつた。私はこれ以上上手くいくとは思つていないので、ちゃんと卒業したら結婚するつもりだ。ただ気がかりなのは、あいつが最近、違法な薬の影響でおかしくなつてきている事だ。マフィアだし違法な薬を持っていてもおかしくはないけど、それが原因で私までやられてしまつては困る。最初は私に惚れていたんだろうけど今は私の事を戦力とかとしか見ていない。私がISに乗り始めてからは「ついにISを手に入れた」なんかと喜んでその後調子に乗り始めた。だから私は男が嫌いだ。

「大変だつたんだね」

「で、小鳥遊さんの交換条件つて何？」

「じゃあ見せるね」

僕はステルスを解除した。胸が無くなり、髪も短くなつていく。

「え？何それ？」
「僕は男なんだよ」
「え？あの話の流れから普通言わないでしょ？」
「だってグリーンノさんが聞いてきたんじゃない？」
「そうだよな、うん。うん？は？って事は私男と同室って事？ありえない！先生に言つて変えてもらう！」
「あの、落ち着いて」
「これが落ち着いてられるかってえの」
「キャラ壊れてるよ……」
「そんなのどうでもいいわ！」
「先生に言うのも織斑先生ならいいよ」
「なんであんなに指図されなきゃならないのよ！」
「織斑先生じゃあないとさっきのステルスで背後から撃つよ！」
「何で織斑先生じゃあなきゃいけないのよ！」
「あの人しか知らないから」
「あつそ。諦めて織斑先生に言っておくわ」
「結局言っただ……」
「まあそれは置いといて、今度のクラス代表決定戦で決着つけてやるわ！覚えておきなさい！」
「何でそんな小物みたいなセリフ……」

クラス代表決定戦当日

一回戦 小鳥遊 空VSアレッシア・グリーンノ

最初から当たっちゃったよ……あの後全く話せなかったな。ステルスでビット一つ飛ばしておいたから、まあ皆には言っていないみたいだけ。

「容赦しないわよ！」

「私も容赦しないよ！」

5…………4…………3…………2…………1…………0!

僕はビットでグアリーノさんの周りを囲んだ。やはりグアリーノさんは抜け出し、ビットを飛ばしてきた。

グアリーノさんの機体、レイ・テンペスタEEの特徴は、その青と白の装甲と背中に6門のビームライフルがついていること。あとシールドビットが六個ついており、裏に鏡がついており、ビームを反射させることができる。

という事は……来た！反射、回避する。避ける！避ける！避ける！避ける！

「避けるだけで攻撃しないの？」

「するよ、避けるコツを掴んだらね」

「掴めるなら掴んでみな！」

避ける！避ける！ビットを飛ばす！そして撃つ！よしっ当てた！グアリーノさんは急いでビットに撃ってくる。反射角を予想、避け……避けれない？反射が変わっていた。二発目、ハイパーセンサーでビットを良く見る。当たる瞬間だけ鏡が透明になってる？避ける！糞、ギリギリだ！そうか！

ビット変形、四つずつ組み合わせさせて六個シールドビットを作る。残りは銃と装甲に変形！ビットから出てる板の色を水色に！鉄壁の防御と鋭い射撃だから……命名、^{きん}?!

射撃型フォーム？を登録しました。

「何？私のパクリ？」

「少し違う」

撃つ！ガード！撃つ！ガードをしても撃つのは辞めない。撃つ！撃つ！撃つ！

その時ブザーが鳴った。

「勝者、小鳥遊 空」

勝ったんだ。ってグアリーノさんが気絶して落ちていく。キャッチ成功！保健室に運んでいこう。

数十分後

一夏VSオルコットさんは、オルコットさんが勝つたらしい。まあ僕は棄権でもするか、クラス代表なりたくないし。

「うう、あれ？ここは？」

「保健室、あの後気絶しちゃったから僕が運んだ」

「悪いね、小鳥遊さん。あと、これから私のことはアレッシアでいわよ」

「じゃあ僕も空でいい」

「そっか、私負けたんだ。空は強いね」

「強くななんか無いよ、今回は偶然だよ」

「そうなの？」

「うん、僕の運が良かっただけ、次は分からないよ」

「空は調子に乗らないんだね」

「世の中そういう人ばかりじゃあ無いよ」

「そうかもね」

「だからさ、少しずつ男に慣れていこうよ！マフィアに殴り込みに行くんだったら僕も手伝うよ」

「ありがとう。女装の理由、きいてあげてもいいよ」

「僕の両親はIS委員会に殺されたんだよ。だから復讐かな？」

「IS学園に潜入って事？」

「そう」

「じゃあ空の復讐、手伝おうか？」

「ありがとう」

「じゃあ疲れたしまた寝るね」

「うん、おやすみ」

Side Alessia

「うん、おやすみ」

空と話してるだけで楽しい、一緒にいるだけで胸の鼓動がはやくなってる気がする。空がいなくなっただけですごく寂しい。何か思ってることをちゃんと伝えられない。もしかして私、空に惚れちゃったの？あんな女みたいな奴に？いや、女の子みたいだから惚れちゃったのかも。どうして私は惚れた想定で考えてるのよ、すっかりしなさい、私！空可愛かったなあ、じゃあなくて、あーもう、どうしたらいいのよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0546ba/>

～IS～雨弓と雷光

2012年1月6日23時46分発行